

第4行にこの翻譯を命じた人として *Arir-bügä tigin* といふ名が示されてある。*Arir-bügä* といふ名は後の蒙古時代になつても蒙古人の間に行はれたこと、忽必烈の弟の有名な阿里不哥 (*Rahisd* の *Arig-Bügä*) の如くである。ここに見える *Arir-bügä* については、何事も知るを得ない。第5行の *dintar* は、波斯語の *dintar*, ソグド語の *dēndār* = *Elekti* に當り、マニ教僧階の第二に相當する名であるが、これが佛教語としてもこの地方で行はれたことは、更めて述べるに及ばない。第6行の *arasang* (*arasang*)? は寫眞の字畫が判明し難いが、多分かく讀むべきであらう (或は *atsang*?)。人名であるかと思ふが、もしさうであればその前の *bisbalig* の後に *-tir* がついて、「*Bisbalig* の人 *Arasang*」とあるべきだが、*-tir* と書かれた跡は寫眞によつては認めるを得ない。第7行の *baqsi* の初綴 *ba* は、また寫眞の字畫が缺けてあるけれども、恐らくかく讀んで誤らないであらう。同じ行の *tyrac* が突厥碑文の *tabrac* と同じく、*Theophylactus Simocatta* に始まる *Taugas* や、その類語で示された「支那」に當ることは、今更いふまでもないが、何故に支那に對してかゝる名稱が用ゐられるに至つたかについては、多くの人々によつて、長い間に互つて、諸種の解釋が行はれたことは周知の如くである。この問題も曾て桑原博士が史林 (第七卷五四四頁以下) や蒲壽庚の事蹟 (九八頁以下) に於て、*Taugas* = 唐家子説を詳述されて以來、學界の定説となつてゐることと思つてゐたが、近頃聞くところによると、なほ必ずしもさうでもないやうである。余は早くからこれと同様の考を懷いて居り、大正九年 (一九二〇年) 巴里で *Pelliot* 教授ともこれについて話合つたこともあつたが、その後桑原博士が史林にその説を公けにせられた時に、直に余に意見を求められたので、余は全然それに賛同したのであつた。たゞ余がかく考へる理由は、博士の論據以外に、遅くも元代から、蠻子即ち南宋や南宋人を指して *Nangias* と稱した (例へば *Quatremère*, *Rashid*. XCIII) のが、南家・南家子の對音に外ならぬと考へるから、*Taugas* も全くこれと相似の形と認めるのが極めて穩當であり、對音の上からも些の支障もないと見るのであり、これに對して博士も直ちに首肯せられたのであつた。かゝる次第で *Taugas* = 唐家子の考は余としては疑ふべくもない定説として差支えないと思つてゐるが、その詳細の論述に至つては別の機會に譲らねばならぬ。(關西大學東西學術研究所論叢第六、石濱先生還曆記念論文五、昭和二十八年九月)